

松 山 大 学 論 集  
第27巻第4 - 2号抜刷  
2015年10月発行

インターンシップの参加・不参加に関する研究  
—— キャリア教育としてのインターンシップを目指して ——

金 森 敏

# インターンシップの参加・不参加に関する研究

—— キャリア教育としてのインターンシップを目指して ——

金 森 敏

## 1. は じ め に

大学設置基準の改正（平成 22 年 4 月 1 日施行）において、大学は生涯を通じた持続的な就業力の育成を目指し、教育課程の内外を通じて社会的・職業的自立に向けた指導等に取り組むことが必要となった。この「社会的、職業的自立に向けた指導」こそ、キャリア教育を意味するものである。

本稿では、キャリア教育の一環として、インターンシップを取り上げる。インターンシップを取り上げる理由は、1997 年の 3 省合意を開始とみなせば、歴史があり、どの大学においても導入がなされているからである。そもそもインターンシップは、学生が一定期間企業などの中で研修生として働き、自分の将来に関連のある就業体験を行える制度である<sup>1)</sup>

このようにインターンシップは各大学で導入されているものの、学生がインターンシップに参加しているかというとは決してそうではない。むしろ、後述するように、2 割程度の学生しかインターンシップに参加していないのが実情である。

そこで本研究では、そもそもなぜ学生はインターンシップに参加しないの

---

1) 倫理憲章の変更により 2016 年 3 月卒から採用活動の日程が繰り下げられ、選考開始時期は 8 月 1 日以降に変更された。倫理憲章変更以前の大学生では 3 年次の夏の長期休暇中にインターンシップに行く事がほとんどで、3 年秋から本格化する就職活動に先駆けて就業体験を積むことで、就職活動本番でのミスマッチを防いでいた。

か、また、どうすれば参加するのか、インターンシップに参加する学生と参加しない学生ではキャンパス生活において何が異なるのかなどをM大学の事例から明らかにする。インプリケーションとして、インターンシップへの参加を増やすことが可能になると考えられるからである。

## 2. インターンシップについて

### 2.1 インターンシップの現状と課題

インターンシップといっても、多様なインターンシップがある。抽象的にインターンシップを定義すれば、「学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと」(文部省・通商産業省・労働省 [1997])となる。

1997年からインターンシップの制度はあるものの、インターンシップについて課題がないわけではない。「経済産業省教育的効果の高いインターンシップの普及に関する調査報告書」[2014]では、インターンシップを充実させるためには、インターンシップは①量的拡大と②質的向上、特に目的に応じた質の保証が急務であると述べ、それぞれについて以下のように現状と課題をまとめている。

インターンシップの①量的拡大にむけた現状と課題では、(a)大学単位のインターンシップ普及率は7割程度まで拡大しているが、参加学生は全体の2%程度にとどまっていること、(b)学生の参加促進のためには、インターンシッププログラムの目的や意義、学生への効果などを学生自身が理解することが必要であること、(c)企業の受入促進のためには、企業の受入負担の軽減、企業の魅力発信に加えて、企業側にとってのメリットをどうつくるかが課題であると述べている。

一方、②質的向上に向けた現状と課題では、(a)どのようなインターンシップが高い教育的効果に結びつくかという共通理解がないこと、また受入企業にとってのメリットの設計が不十分で、結果として教育プログラムとしての質が

向上しにくいこと、(b)教育的効果の高いプログラムを開発・運用する体制が、企業、地域、大学の中に整備されていないこと、(c)プログラムを開発・運用する専門人材が質量ともに不足していること、(d)インターンシッププログラムを改善するための評価の仕組みや評価項目の整備が不十分であると述べている。

## 2.2 本稿で対象とするインターンシップの特徴

インターンシップといっても、実施する機関によって、インターンシップの目的やプログラムも変わってくる。ここでは代表的なインターンシップの機関を3つほど紹介する。1つ目はリクナビやマイナビのインターンシップであり、特徴としてはインターンシップ先に大手企業が多く採用に直結しているケースが多く見られることである。2つ目は各県におけるインターンシップ推進協議会などが地元の中堅・中小企業と学生のマッチングを行うものである。その目的は採用直結がないわけではないが、まずは地元の中堅・中小企業を知ってもらうことである。3つ目はNPO系が行っている長期実践型インターンシップである。特徴としては、3週間～6週間の長期間、中小企業の経営者の右腕としてインターンシップを経験することである。

このように実施する機関によって、インターンシップの目的も様々である。これらを踏まえた上で、本稿で取り上げるインターンシップの特徴は、①コンソーシアム系のインターンシップと②個別大学のインターンシップが組み合わさったものである。

①コンソーシアム系のインターンシップの特徴は、地域の大学がゆるく連携しながらインターンシップを行っており、既述したインターンシップ推進協議会とは趣が異なる。コンソーシアムえひめのインターンシップの目的は、大学を卒業する前の段階から職業に対する理解と実感を得て、学業に励む学生が増えることでミスマッチの解消や地域の人材育成における産学連携にある<sup>2)</sup>

---

2) (<http://www.univcon.ehime-u.ac.jp/internship.html>, 2014年12月2日参照。)

その下で②個別大学独自にインターンシッププログラムが実施されているのが特徴である。したがって、各大学におけるインターンシッププログラムは異なる。

研究対象である M 大学では、文系（経済・経営・人文・法）1,200 名のうち毎年 180 名程度（15%）の学生がインターンシップに参加している。希望者は 200 名～230 名程度だが、受け入れ先の企業数との関係で 180 名程度に制限される。まずインターンシップに参加したい学生は履修登録が必要となる。そしてインターンシップ実習前に前期（15 回）、後期（15 回）の講義を受ける。つまり、M 大学のインターンシップは授業の一環として行われており、学生は要件を満たせば単位が与えられる。なお前期の主な講義内容は、インターンシップの目的、自身のキャリア設計、マナーなど、インターンシップを受けるにあたっての心構えが中心である。一方、後期の主な講義内容は、インターンシップ前に設定した目標の検証・分析、発表であり、振り返りが中心である。

これらのことからわかるように、本稿が研究対象とするインターンシップはコンソーシアムえひめの中の M 大学におけるインターンシップである。なお以下、「M 大学におけるインターンシップ」と略す。

### 3. 先行研究とリサーチクエッション（RQ）

既述したように、大学単位のインターンシップ普及率は 7 割程度まで拡大しているが、参加学生は全体の 2 % 程度にとどまっており、インターンシップの参加の有無については緊急の課題である。

これまでインターンシップの参加に関する研究として、田中 [2007]、河野 [2011]、平尾・田中 [2014] の研究がある。田中 [2007] では、『インターンシップに関する学生の意識調査報告書』と『インターンシップ推進のための調査研究委員会報告書』の結果をもとにインターンシップの参加について整理を行った。

その結果『インターンシップに関する学生の意識調査報告書』と『インター

ンシップ推進のための調査研究委員会報告書』に共通している点は、「就職活動全般に役立ちそう」、「働くことがどういうものか体験したい」、「希望する仕事の実務を体験したい」といったものであった（図表1）。

図表1 インターンシップへの参加理由・参加目的

・就職活動全般に役立ちそうだった	80.0%	・働くことがどういうものか体験したい	80.3%
・働くことがどういうものか体験したかった	75.8%	・就職活動全般に役立ちそう	67.2%
・いままでやったことがない体験をしたかった	60.6%	・就職で希望する業種・職務の実務	61.5%
・夏休みに目的や目標のある活動をしたかったから	58.2%	・業種・職務の専門能力の知識を習得	25.3%
・希望する仕事の実務を体験したいから	55.8%	・単位がもらえるから	16.4%
・身につけたい専門知識やスキルを獲得できそうだから	31.5%	・参加企業からの内定に役立ちそう	13.9%

出所：『インターンシップ推進支援センター報告書』  
複数回答（N=165）

出所：厚生労働省『インターンシップ推進のための調査研究委員会報告書』  
複数回答（N=872）

河野〔2011〕では、インターンシップ経験者・未経験者に、自身の能力・スキルの自己評価等をアンケート調査で尋ねた。その結果、次の3点を明らかにした。1つ目は、インターンシップ経験者はその経験を通じて対人スキルや自己管理能力の獲得に効果を感じていた。2つ目は、インターンシップ経験者と未経験者では、現在の能力・スキル等に対する自己評価は経験者のほうが高かった。3つ目は、インターンシップ経験者は、未経験者に比べて、大学の授業に対しその活用法を知りたいと望んでいた。また、インターンシップ経験者が実習を行う理由としては、「日常では経験できないことを体験できそうだから（70%）」、「インターンシップ先の業界・企業に就職したいから（65%）」、「就職全般に有利だと思ったから（45%）」の上位3つを挙げている。

これらの研究はインターンシップの参加について触れられているものの、研

究対象が「インターンシップ後の実習を経験した学生」であった。

その一方で、平尾・田中〔2014〕では、「インターンシップの実習に参加する前の段階」で、インターンシップへの参加・不参加、特に不参加について調査を行った。具体的には、インターンシップ実習後にアンケートを行うのではなく、インターンシップ実習前において、山口大学の学生にインターンシップの参加の有無を尋ねた（図表2）。その上で、インターンシップに参加しない理由を学生に自由記述（106個）で書いてもらった。その結果、自由記述の特徴として、1つ目は就職活動につながらないインターンシップについては意味がないという考え、2つ目は参加したくても資金面が厳しくて参加できにくいこと、3つ目は参加する気持ちも、行く気もなく、面倒というやる気がないこと、4つ目は公務員志望であり、その勉強があるので参加できないということであった。

このように平尾・田中〔2014〕では、インターンシップに参加する前の段階

図表2 山口大学の学生がインターンシップに参加する理由と参加しない理由

参加する理由	参加しない理由
・興味のある業界・企業を詳しく知りたいから 63.1%	・学業の予定があり余裕がないから 33.8%
・働くことを体験したいから 63.1%	・部活・サークル・アルバイトで忙しいから 29.9%
・何か自分の役にたちそうだから 60.3%	・どこに参加したらいいかわからないから 26.6%
・自分の適性を把握したいから 38.6%	・面倒だから 14.3%
・参加したほうがいいと誰かに言われたから 23.1%	・何がいいのか意義がよくわからない 13.0%
・とにかく参加してみたいから 21.4%	・先輩を見て参加しなくてもよさそうと思ったから 13.0%
・働く力を向上させたいから 16.3%	・興味ある業界・企業が募集していないから 9.7%
・先輩をみて参加したほうがよいと思ったから 14.9%	・参加しなくてもいいとだれかに言われたから 8.4%
	・就職につながるものではないから 6.5%

出典：平尾・田中〔2014〕p.23より。ただし、割合比が高いものから整理しなおした。

で学生にインターンシップ参加の有無を調べているものの、計量分析となるとやや課題が残されている。

そこで本研究では、平尾・田中〔2014〕同様に、インターンシップに参加する前の段階で学生にインターンシップ参加の有無について計量分析から明らかにする。インターンシップに参加予定の学生とインターンシップに参加する予定がない学生のキャンパス生活の視点から、インターンシップへの参加に関する研究を行うことにする。具体的には、次の2つのRQをたて、明らかにする。

RQ1：インターンシップに参加しない学生は、なぜ参加しないのか？ また、どうすれば参加するのか？

RQ2：①インターンシップに参加予定の学生と参加予定がない学生では、キャンパス生活は何が異なっているのか？ ②インターンシップに参加予定の学生は参加予定がない学生と比べて、キャンパス生活における項目においてオッズ比はどれだけ違うのか？

## 4. 調査方法

### 4.1 調査対象者

アンケートは、インターンシップに参加予定の学生140名、インターンシップに参加予定がない学生122名、計262名にアンケート調査を行った。

インターンシップに参加予定の学生内訳は、単位認定型インターンシップ98名、非単位認定型インターンシップ42名である。単位認定型インターンシップとは、単位がつくインターンシップであり、夏季休暇中に行われるものである。非単位認定型インターンシップとは、単位はつかず、春季休暇中に行われるものである。なお単位認定型インターンシップと非単位認定型インターンシップでは、性質が異なるものの、後述する4つの設問項目（①日々熱心に取り組んでいる活動の程度、②学びの楽しさについて、③将来のキャリアについて、④大学生活の全体的満足感について）において平均値の差（有意差）は見



られなかったので、1つにまとめて扱うことにした。

参加予定の学生の属性は、男子学生 29.9%、女子学生 70.1%であった。学部は経済 7.8%、経営 61%、人文英語 11.3%、人文社会 14.9%、法 5.0%、薬 0%であった。学年は1年 6.3%、2年 34.3%、3年 59.4%であった（図表3）。

**図表3 インターンシップに参加予定の学生と参加予定がない学生の属性比較**

	参加予定の学生 140 人		参加予定がない学生 122 人	
男女比	男子学生 女子学生 N=137（欠損値除く）	29.9% 70.1%	男子学生 女子学生 N=116（欠損値除く）	60.3% 39.7%
学部比	経済 経営 人文英語 人文社会 法 薬	7.8% 61.0% 11.3% 14.9% 5.0% 0.0%	経営 N=116（欠損値除く）	100%
学年比	1年 2年 3年 N=128（欠損値除く）	6.3% 34.3% 59.4%	3年 4年 N=116（欠損値除く）	84.5% 15.5%

なお、インターンシップに参加予定の学生とは、インターンシップの授業を履修している学生であり、夏季休暇中にインターンシップ実習を必ず行う学生である。彼らに対しては、2014年6月、インターンシップの授業中にアンケートを配布し、学生への倫理を配慮し回答ができる人のみ提出してもらった。

一方、インターンシップに参加予定のない学生とは、インターンシップの授業を履修していない学生である。ただし調査時点ではインターンシップに参加予定がない学生であっても、その後インターンシップに参加している可能性がまったくないわけではない。個人で他の機関のインターンシップに参加しているかもしれないが、それらの学生すべてを把握することは非常に困難だからである。

そこで本稿では、インターンシップに参加予定がない学生とはコンソーシアムえひめのインターンシップに参加していない学生に限定する。2014年6月、経営学部の学生にアンケートを配布した。経営学部の学生に配布した理由は、インターンシップに参加する学生が一番多い学部であり、インターンシップは人気があるにもかかわらず、あえて参加しない学生にはどのような特徴があるのかを知りたかったからである。こちらも学生への倫理を配慮し回答ができる人のみ提出してもらった。加えて、教員による指示として、リクナビやマイナビ、他県のインターンシップ推進協議会などでインターンシップに申し込んでいる人は記入しないようにと口頭で説明を行った。

## 4.2 設問内容

RQ1の設問として、インターンシップに参加予定がない学生は、なぜ参加しないのか（11項目）、また、どうすれば参加するのか（6項目）について複数回答による質問を行った。

インターンシップに参加しない理由として、『リクルートカレッジマネジメント』[2014]を参考にしながら、11項目を作成した。

参考にした項目は、①インターンシップの内容に魅力を感じなかった、②実施期間（春休み・夏休み）が自分の予定と合わない、③採用選考上有利になると思わなかった、④志望企業がインターンシップを実施していなかった、⑤インターンシップの制度そのものがあることを知らなかったである。

残り6項目は、学生へのヒアリングから独自に質問を設けた。それは、①インターンシップをしなくてもアルバイトで働く意識や仕事とは何かかわかると思った、②部活動が忙しくて時間がとれない、③お金をもらわないで働くのは損した気がする、④大学生活の刺激になるとは思わなかった、⑤知人・友人・先輩等からインターンシップは意味がないと聞いていた、⑥インターンシップでは働く意識や仕事とは何かなどわからないと思ったである。

次に、どのような条件ならインターンシップに参加するか独自に6つ設問を

設けた。それは①採用選考上有利になるもの、②1人ではなく3人組でインターンシップに参加できるもの、③春休み夏休みではなく学期中に実施するもの、④インターン実施中、給与がでるもの、⑤夏季インターンシップの場合は単位が現状の2倍でるもの、⑥その他である。

RQ2の設問内容としては、インターンシップの授業を受けている人のみが答えられる内容では比較ができないので、M大学で用いられている学生の授業評価アンケートを参考に設問を設けた。その理由は、M大学のアンケートを用いることで、M大学の学生であれば馴染みがあるからである。また、将来のキャリアに関する考えについての設問も設けた。その理由は、インターンシップは授業の一環ではあるものの、通常の授業とは異なり、職業体験や働く意識を醸成する目的があるので、将来のキャリアに関してどのような考えを持っているかを明らかにしたかったからである。

その結果、①日々熱心に取り組んでいる活動の程度 ( $\alpha = .59^{(3)}$ )、②学びの楽しさについて ( $\alpha = .81$ )、③将来のキャリアについて ( $\alpha = .83$ )、④大学生活の全体的満足感について ( $\alpha = .77$ ) の4つの設問を設けた。

具体的には、①日々熱心に取り組んでいる活動の程度では、q1.1 共通教育への取組み、q1.2 専門教育への取組み、q1.3 ゼミへの取組み、q1.4 資格・試験対策の取組み、q1.5 クラブ・サークルへの取組み、q1.6 ボランティア活動への取組み、q1.7 アルバイトへの取組みの7つからなっている。②学びの楽しさについては、q2.1 学部・学科の満足度、q2.2 カリキュラムの満足度、q2.3 授業内容の理解度、q2.4 授業によって知識・興味が増えたか、q2.5 多様なものの見方ができたか、q2.6 授業は将来のことを考えるきっかけになったかの6つである。③将来のキャリアについては、q3.1 将来を考えて自身の興味関心を高めているか、q3.2 将来を考えカリキュラムの選択を行っているか、q3.3

---

3) ここでは日々熱心に取り組んでいる活動の程度を聞いており、「日々の活動の熱心度の尺度」を作成するのが目的ではないので、クローンバックの $\alpha$ 係数も本来は必要ないものの一応提示しておく。

現在, 興味のある業界はあるか, q3.4 現在, 就職したい会社はあるか, q3.5 現在, 興味のある職種はあるかの5つからなっている。④大学生活の全体的満足感については, q4.1 大学への所属意識, q4.2 大学生活, q4.3 M 大学に入学できてよかったかの3つである(図表4参照)。

図表4 設問項目

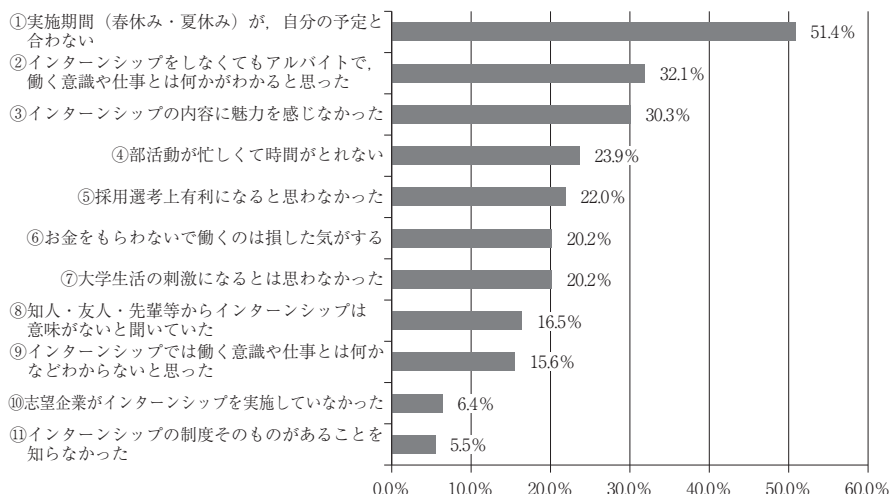
①日々熱心に取り組んでいる活動の程度	q1.1 共通教育への取組み q1.2 専門教育への取組み q1.3 セミへの取組み q1.4 資格・試験対策の取組み q1.5 クラブ・サークルへの取組み q1.6 ボランティア活動への取組み q1.7 アルバイトへの取組み
②学びの楽しさについて ( $\alpha = .81$ )	q2.1 学部・学科の満足度 q2.2 カリキュラムの満足度 q2.3 授業内容の理解度 q2.4 授業によって知識・興味が増えたか q2.5 多様なものの見方ができたか q2.6 授業は将来のことを考えるきっかけになったか
③将来のキャリアについて ( $\alpha = .83$ )	q3.1 将来を考えて自身の興味関心を高めているか q3.2 将来を考えカリキュラムの選択を行っているか q3.3 現在, 興味のある業界はあるか q3.4 現在, 就職したい会社はあるか q3.5 現在, 興味のある職種はあるか
④大学生活の全体的満足感について ( $\alpha = .77$ )	q4.1 大学への所属意識 q4.2 大学生活 q4.3 M 大学に入学できてよかったか

なお, すべての設問項目は「〇〇でない」から「〇〇である」の4件法である。例えば, q1.1 の取組みでは, 「取組んでいない」～「取組んでいる」という形式である。

## 5. 調査結果

### 5.1 インターンシップに参加しない理由

図表5 M大学におけるインターンシップに参加しない理由 独自調査（複数回答 N=266）

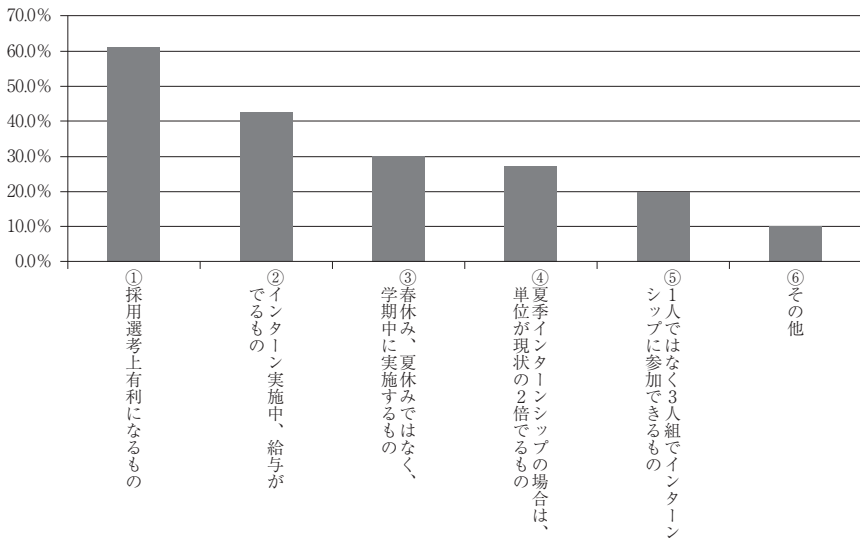


M大学の学生がインターンシップに参加しない理由は、①実施期間（春休み・夏休み）が、自分の予定と合わない（51.4%）、②インターンシップをしなくてもアルバイトで、働く意識や仕事とは何かがわかると思った（32.1%）、③インターンシップの内容に魅力を感じなかった（30.3%）、④部活動が忙しくて時間がとれない（23.9%）、⑤採用選考上有利になると思わなかった（22.0%）、⑥お金をもらわないで働くのは損した気がする（20.2%）、⑦大学生活の刺激になるとは思わなかった（20.2%）、⑧知人・友人・先輩等からインターンシップは意味がないと聞いていた（16.5%）、⑨インターンシップでは働く意識や仕事とは何かなどわからないと思った（15.6%）、⑩志望企業がインターンシップを実施していなかった（6.4%）、⑪インターンシップの制度

そのものがあることを知らなかった（5.5%）であった（図表5）。

次に、どうすればインターンシップに参加するか尋ねた結果、回答（複数回答）は①採用選考上有利になるもの（60.6%）、②インターン実施中、給与がでるもの（42.2%）、③春休み、夏休みではなく、学期中に実施するもの（30.3%）、④夏季インターンシップの場合は、単位が現状の2倍でるもの、⑤1人ではなく3人組でインターンシップに参加できるもの（20.0%）、⑥その他（10.1%）であった（図表6参照）。

図表6 どのような条件ならインターンシップに参加するか（複数回答 N=208）



## 5.2 参加予定の学生と参加予定がない学生における違いとその比率

参加予定の学生（N=140）と参加予定がない学生（N=122）における違いを把握するために、まず①日々熱心に取り組んでいる活動の程度、②学びの楽しさについて、③将来のキャリアについて、④大学生活の全体的満足感について、計21個の設問に対して平均値の比較（T検定）を行った。

その結果、有意差があった項目は①専門教育への取組み  $t(259) = 3.82$ ,  $p < .01$ , ②ゼミへの取組み  $t(258) = 3.06$ ,  $p < .01$ , ③資格・試験対策の取組み  $t(260) = 5.10$ ,  $p < .01$ , ④ボランティア活動への取組み  $t(260) = 3.86$ ,  $p < .01$ , ⑤授業によって知識・興味が増えた  $t(261) = 2.86$ ,  $p < .05$ , ⑥将来を考えて自身の興味関心を高めているか  $t(258) = 2.99$ ,  $p < .05$ , ⑦将来を考えカリキュラムの選択  $t(257) = 2.26$ ,  $p < .05$ , ⑧M大学に入学できてよかったか  $t(257) = 2.63$ ,  $p < .01$ であった(図表7)。

図表7 インターンシップ参加予定の学生と参加予定のない学生の平均値の比較

	インターンシップ参加予定の学生 (N=140) ただし欠損値を除く	インターンシップ参加予定のない学生 (N=122) ただし欠損値を除く	t 値
専門教育への取組み	2.90(0.73)	2.77(0.82)	3.82***
ゼミへの取組み	3.49(0.65)	3.22(0.78)	3.06***
資格・試験対策の取組み	2.98(0.82)	2.44(0.88)	5.10***
ボランティア活動への取組み	2.05(0.92)	1.62(0.84)	3.86***
授業によって知識・興味が増えた	3.05(0.66)	2.80(0.75)	2.86**
将来を考えて自身の興味関心を高めているか	2.88(0.71)	2.61(0.76)	2.99**
将来を考えカリキュラムの選択	2.76(0.79)	2.54(0.75)	2.26**
M大学に入学できてよかったか	3.17(0.76)	2.91(0.83)	2.63***

セル内は平均値, ( ) 内は標準偏差。両側検定 \*\*\*:  $p < .01$ , \*\*:  $p < .05$ , \*:  $p < .10$

次に、インターンシップに参加予定の学生は参加予定がない学生と比べて、キャンパス生活における項目においてオッズ比は何がどれくらい違っているのかを把握することにした。変数選択として、既述したT検定において有意差があった8つの変数を分析に用いた。

その理由は、8つの変数のどれが有意に効いているのかを把握したかったからである。そのためステップワイズを用いた変数増減法により変数を増減させ

なかった。従属変数は、インターンシップに参加予定=1, 参加予定がない=0である。

また多重共線性の確認を行った結果、各変数の VIF の値は、(q1.2) VIF=1.41, (q1.3) VIF=1.33, (q1.4) VIF=1.10, (q1.6) VIF=1.01, (q2.4) VIF=1.21, (q4.1) VIF=1.30, (q4.2) VIF=1.35, (q8.4) VIF=1.10 であり、多重共線性の問題は確認できなかった。

ロジスティック回帰分析の結果、モデル $\chi^2$ 検定の結果は $P<.01$ であり有意であり、資格・試験対策の取組み、ボランティア活動への取組み ( $p<.01$ )、将来を考えて自身の興味関心を高めていた ( $p<.05$ ) (図表8)。

図表8 ロジスティック回帰分析の結果

	95% 信頼区間			
	オッズ比	下限	上限	p 値
専門教育への取組み	1.17	0.74	1.85	0.49
ゼミへの取組み	1.03	0.66	1.61	0.88
資格・試験対策の取組み	1.73	1.23	2.44	0.00***
ボランティア活動への取組み	1.56	1.13	2.17	0.00***
授業によって知識・興味が増えた	1.30	0.83	2.02	0.23
将来を考えて自身の興味関心を高めているか	1.56	1.01	2.41	0.04**
将来を考えカリキュラムの選択	0.89	0.58	1.37	0.60
M大学に入学できてよかったか	1.26	0.87	1.82	0.22
定数	0.01	0.01	0.05	0.00***

AIC : 311.51

Dnull : 334.29 (自由度 242), D : 293.51 (自由度 234)

モデル $\chi^2$ 検定  $p<0.01$

\*\*\* :  $p<.01$ , \*\* :  $p<.05$ , \* :  $p<.10$



## 6. 考 察

### 6.1 インターンシップに参加しない理由と参加する条件

図表9 インターンシップに参加しない調査結果の整理

リクルートカレッジマネジメントより インターンシップに参加しなかった理由	M大学の学生が参加しない理由	山口大学の学生が参加しない理由
<u>インターンシップの内容に魅力を感じなかった (46.9%)</u>	<u>実施期間 (春休み・夏休み) が自分の予定と合わない (51.4%)</u>	学業の予定があり余裕がないから (33.8%)
<u>採用選考上有利になると思わなかった (21.6%)</u>	<u>インターンシップをしなくてもアルバイトで働く意識や仕事とは何かかわかると思った (32.1%)</u>	部活・サークル・アルバイトで忙しいから (29.9%)
<u>実施期間が自分の予定と合わない (21.0%)</u>	<u>インターンシップの内容に魅力を感じなかった (30.3%)</u>	どこに参加したらいいのかわからないから (26.6%)
志望企業がインターンシップを実施していなかった (10.3%)	部活動が忙しくて時間がとれない (23.9%)	面倒だから (14.3%)
インターンシップ自体を知らなかった (8.5%)	<u>採用選考上有利になると思わなかった (22.0%)</u>	<u>何がいいのか意義がよくわからない (13.0%)</u>
インターンシップ実施企業の情報を入手できなかった (6.8%)	<u>お金をもらわないで働くのは損した気がする (20.2%)</u>	先輩を見て参加しなくてもよさそうと思ったから (13.0%)
参加したかったインターンシップの選考に落ちた (4.9%)	大学生活の刺激になるとは思わなかった (20.2%)	興味ある業界・企業が募集していないから (9.7%)
会場 (地域・場所) へ自宅から通うことができなかった (4.9%)	知人・友人・先輩等からインターンシップは意味がないと聞いていた (16.5%)	参加しなくてもいいとだれかに言われたから (8.4%)
大学における単位取得につながらなかった (4.5%)	<u>インターンシップでは働く意識や仕事とは何かなどわからないと思った (15.6%)</u>	<u>就職につながるものではないから (6.5%)</u>
参加したかったインターンシップへの申し込みが間に合わなかった (4.3%)	志望企業がインターンシップを実施していなかった (6.4%)	
その他 (4.1%)	インターンシップの制度そのものがあることを知らなかった (5.5%)	

図表9からもわかるように、M大学の学生が参加しない理由として、特徴的な点は「実施期間（春休み・夏休み）が自分の予定と合わない（51.4%）」ことであり、50%を超えていることである。逆に言えば、春休み・夏休みでなく、通常の時期などにおいてであれば、インターンシップに参加してもいいと考えているのかもしれない。

既存調査の1つとして『リクルートカレッジマネジメント』[2014]では、実施期間が自分の予定と合わない（21.0%）は3番目の理由で、1番目の理由はインターンシップの内容に魅力を感じなかった（46.9%）であった。ちなみに、M大学ではインターンシップの内容に魅力を感じなかった（30.3%）は3番目であった。

このような違いの理由として、対象としている学生やインターンシップの目的が異なるからだと考えられる。M大学の対象は地方における大学を通してのインターンシップであり、どちらかというところと教育の一環であり就職とは必ずしも結びついていない。一方、『リクルートカレッジマネジメント』[2014]の調査対象は、首都圏を中心とした学生がメインであり、インターンシップもやや就職よりと考えられる。

もう1つM大学の学生がインターンシップに参加しない理由の特徴として、「インターンシップをしなくてもアルバイトで働く意識や仕事とは何かわかると思った（32.1%）」、「お金をもらわないで働くのは損した気がする（20.2%）」、「インターンシップでは働く意識や仕事とは何かなどわからないと思った（15.6%）」という項目である。最初の2つの項目である「インターンシップをしなくてもアルバイトで働く意識や仕事はわかる」、「お金をもらわないで働くのは損」といった内容は、「インターンシップ」でなくても「アルバイト」で十分といった考えであろう。それに輪をかけているのが、「インターンシップでは働く意識や仕事とは何かわからない」といった内容である。この考えは山口大学の学生がインターンシップに参加しない理由の1つである、「何がいいのか意義がよくわからない（13.0%）」と一致する。これらのことから分か

るように、学生はインターンシップをアルバイトの延長と考えており、インターンシップが職業人生を考える上でのキャリア教育の一環だとはあまり捉えられていない<sup>4)</sup> ようである。

なおM大学のインターンシップに参加しない設問項目は、既述したようにリクルートカレッジマネジメント[2014]と独自に設問を設けたものであった。一方、山口大学のインターンシップに参加しない理由は山口大学独自の設問であった。

設問項目は異なるものの、M大学の学生がインターンシップに参加しない理由と山口大学の学生がインターンシップに参加しない理由として次の2点は共通していた。それは、①部活動が忙しくて時間がとれない(M大学23.9%：山口大学29.9%)、②知人・友人・先輩等からインターンシップは意味がないと聞いていた(M大学16.5%：山口大学8.4%)である。これら2つは地方の大学生がインターンシップに参加しない理由の特徴なのかもしれない。今後の研究課題の1つである。

次に、インターンシップに参加する条件として、採用選考上有利になるものが6割を超えていることからわかるように、学生はインターンシップに採用に結びつくインターンシップを望んでいることがわかる。リクルートカレッジマネジメントのインターンシップに参加しなかった理由では「採用選考上有利になるとは思わなかった(21.6%)」、M大学の学生がインターンシップに参加しない理由では「採用選考上有利になるとは思わなかった(22.0%)」、山口大学の学生がインターンシップに参加しない理由では「就職につながるものではないから(6.5%)」であった。

採用に有利になるインターンシップであれば参加したいというのが学生の本

---

4) 実際、インターンシップとアルバイトにおける違いがわかるプログラムが少ないのも事実である。例えば、アルバイトの人がする作業をインターンシップの学生にさせる小売業などもある。したがって、今後はキャリア教育としてのインターンシッププログラムを増やす必要がある。つまり、働くとは何か、なぜ働くのかといった、働くことについてのより本質的なプログラムが必要であろう。

音であろう。しかしながら、採用選考上有利になるインターンシップとは「インターンシップという名を借りた就職活動」となったら変わらず、「キャリア教育としてのインターンシップ」ではないことは指摘しておく必要がある。今後は「就職活動としてのインターンシップ」と「キャリア教育としてのインターンシップ」を分ける必要があるのかもしれない。例えば1・2年生であれば、キャリア教育としてのインターンシップとして、職業を知る機会、働くとはといったマインドの醸成などのプログラムをメインにし、「就職活動としてのインターンシップ」ではエントリーシートの書き方、採用活動に直結した活動などに力点を置いたプログラムなどである。

## 6.2 参加予定の学生と参加予定がない学生における違いとオッズ比

インターンシップ参加予定の学生と参加予定のない学生を①日々熱心に取り組んでいる活動、②学びの楽しさについて、③将来のキャリアについて、④大学生活の全体的満足感から比較した。

その結果、①日々熱心に取り組んでいる活動として、インターンシップ参加予定の学生の方が参加予定のない学生よりも専門教育への取り組み、ゼミへの取り組み、資格・試験対策の取り組み、ボランティア活動への取り組みにおいて熱心に取り組んでいるようである。②学びの楽しさについては、インターンシップ参加予定の学生の方が参加予定のない学生よりも大学の授業によって知識・興味が増えたと感じているようである。

河野〔2011〕の調査がインターンシップに参加した、ないしは参加しなかった学生からの結果ではあるものの、インターンシップに参加予定、ないしは参加予定がない学生においても同じようにいえると考えられる。つまり、インターンシップに参加予定の学生は参加予定がない学生よりも主体的に大学の学習に取り組もうとする力や資格・検定を取ろうとする意欲が高いと考えられる<sup>5)</sup>。

また、本稿ではボランティア活動へ熱心に取り組んでいる学生の方がそうでな

い学生よりもインターンシップに参加するといえそうである。そもそも「ボランティア活動は個人の自発的な意思に基づく自主的な活動であり、活動者個人の自己実現への欲求や社会参加意欲が充足される<sup>5)</sup>」ものである。つまり、ボランティア活動に参加する人は自己実現と社会参加意欲を充たすために、ボランティア活動に参加している。インターンシップは就業体験であるものの、将来どのような方向に進みたいかといった自己実現欲求や大学のキャンパスだけでなく社会との接点をもつという社会参加意欲を充たす側面がないわけではない。したがって、ボランティア活動に参加する人はインターンシップにも参加すると考えられる。

③将来のキャリアについては、インターンシップ参加予定の学生の方が参加予定のない学生よりも将来を考えて自身の興味関心を高めており、また、将来を考えカリキュラムの選択をしているようである。将来の職業を考えた上で自分の興味・関心を高めている学生がインターンシップに参加する理由は、授業の一環であるインターンシップとはいえ、通常の授業では接することができない、社会人と一定の期間いっしょに職場体験を経験できるからだと考えられる。つまり、普段の大学生活で得られない非日常体験への好奇心から参加するものであり、これは河野〔2011〕のインターンシップ経験者が実習を行う理由として、「日常では経験できないことを体験できそうだから」に一致する。

④大学生活の全体的満足感については、インターンシップ参加予定の学生の方が参加予定のない学生よりもM大学に入学できてよかったと感じているようである。しかしながら、なぜM大学に入学できてよかったと感じている学生はインターンシップに参加するか論理的に説明することは難しい。今後の課題の1つである。

---

5) ただし、河野〔2011〕におけるインターンシップ参加学生とインターンシップに参加しなかった学生におけるスキル・能力における差は ( $p < .10$ ) であったものの、本研究では ( $p < .05$ ) であった。

6) 厚生労働省「ボランティア活動」より。[http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi\\_kaigo/seikatsuhogo/volunteer/index.html](http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/volunteer/index.html) (2015年7月27日参照)

これまでは参加予定の学生と参加予定がない学生における違いについて考察を行ってきた。さらにここでは、ロジスティック回帰分析を行った結果、インターンシップに参加する学生は、参加しない学生と比べて、資格・試験対策の取組みの割合が1.73倍高く、ボランティア活動への取組みの割合が1.56倍高く、将来を考えて自身の興味関心を高めている割合が1.56倍高かった。

検定の方法がT検定と尤度比検定と異なるので有意差の項目が異なっているものの、インターンシップ参加予定の学生として、資格・試験対策の取組みの割合が高いというのは1つの知見であろう。なぜなら、資格・試験対策の取組みを行っている学生ほどインターンシップに参加するということだからである。

一見すると資格・試験対策を熱心に取り組んでいる学生はどこかのスクールで勉強をしているイメージがある。しかしながら、少なくとも本調査では、資格・試験対策を行っている学生ほどインターンシップに参加予定の比率が高かった。資格・試験対策を行っている学生は、就職を意識しているからこそ資格・試験対策を行っていると考えられる。そうであるならば、資格・試験対策を行っている学生の方がインターンシップに参加する割合が高いのは、就職を意識しているからだと考えられる。

また、調査の方法としてインターンシップ参加予定の学生は把握できたものの、インターンシップに参加予定がない学生については十分把握しきれていないのが実情である。本稿では、インターンシップの授業をとっていない学生をインターンシップに参加予定がない学生として位置づけて調査を行ったものの、これは方法論として残された課題である。

## 7. お わ り に

最後に、本研究の貢献と今後の課題についてまとめる。

## 7.1 貢献

研究対象がM大学と限られており、一般化には限界があるものの、貢献の1つ目はM大学の学生がインターンシップに参加しない理由として、「春休み・夏休みの実施期間が自分の予定と合わない」割合が半数を超えていたことを明らかにしたことである。

2つ目の貢献は、M大学の学生がインターンシップに参加しない理由として、学生はインターンシップをアルバイトの延長と考えている可能性が高く、インターンシップが職業人生を考える上でのキャリア教育の一環としてあまり考えられていないことを明らかにしたことである。その上で、どのような条件であればインターンシップに参加するかといえば、採用選考上有利になるインターンシップということを明示したことである。

3つ目の貢献は、インターンシップ参加予定の学生と参加予定のない学生を(a)日々熱心に取り組んでいる活動、(b)学びの楽しさについて、(c)将来のキャリアについて、(d)大学生生活の全体的満足感から比較したことである。その結果、インターンシップ参加予定の学生の方が参加予定のない学生よりも専門教育への取組み、ゼミへの取組み、資格・試験対策の取組み、ボランティア活動への取組みにおいて熱心に取り組んでいた。また、大学の授業によって知識・興味が増えたと感じており、加えて、将来を考えて自身の興味関心を高め、将来を考えカリキュラムの選択をしていた。さらに、M大学に入学できてよかったと感じていた。これらを踏まえた上で、ロジスティック回帰分析を行った結果、インターンシップに参加する学生は、参加しない学生と比べて、資格・試験対策の取組みの割合が非常に高いことがわかった。

## 7.2 今後の課題

1つ目は、「就職活動としてのインターンシップ」と「キャリア教育としてのインターンシップ」を分けることを提示したい。例えば1・2年生であれば、キャリア教育としてのインターンシップとして、職業を知る機会、働くとはと

いったマインドの醸成などのプログラムをメインにし、「就職活動としてのインターンシップ」では採用に直結するプログラムなどに力点を置く必要があるのかもしれない。加えて、インターンシップが職業人生を考える上でのキャリア教育の一環としてあまり考えられていないので、キャリア教育としてのインターンシッププログラムの構築を目指す次第である。

2つ目は、実際にインターンシップに参加した学生はインターンシップに満足したのか、また、企業は受け入れた学生に満足したのか、インターンシップの効果はどのくらい持続するのかなどを明らかにする次第である。

### 参 考 文 献

- インターンシップ推進支援センター（2006）『インターンシップに関する学生の意識調査』。「経済産業省教育的効果の高いインターンシップの普及に関する調査報告書」2014年。
- 厚生労働省（2005）『インターンシップ推進のための調査研究委員会報告書』。
- 河野志穂（2011）「文系大学生のインターンシップが大学での学びに与える効果：早稲田大学を事例として」『日本インターンシップ学会年報』（14），pp. 9-15。
- 田中宣秀（2007）「高等教育機関におけるインターンシップの教育効果に関する一考察：新たな「意義」をみだし、改めて「効果」を考える」『日本インターンシップ学会年報』（10），pp. 7-14。
- 大学コンソーシアムえひめ（2013）『大学コンソーシアムえひめインターンシップ受入企業アンケート調査』。
- 平尾元彦・田中久美子（2014）「インターンシップに参加しない理由－大学3年生夏のアンケート調査から見えてくるもの」『インターンシップ研究年報』（17），pp. 21-25。
- 文部省・通商産業省・労働省（1997）「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」（1997年9月18日発表）。
- 『リクルートカレッジマネジメント』（187），2014。